

# むつごろう通信

14号

2008年

9月30日発行

寄稿

## 海と関わり、いろいろな恩恵を受けて

上天草市議会議員  
天草不知火海区漁業調整委員会委員  
佐藤 ユミ子



海は幼いころの遊び場だった。汐が引いたら、友達と貝掘りやカキ打ち、ニシ捕り、シャク釣りなどをして遊んだ。

ある日、ニシ捕りで浜辺を歩いていると、沖を小舟が通った。すると、小さいイワシが浜辺にうちあがりぴちぴちと跳ねる。急いで拾い、家に持ち帰り喜ばれた。また、梅雨の頃、汐が引いた藻の中に甲貝がいた。小石や藻に産卵している。「海ほうずき」である。それを採り、学校に持って行き友達に自慢した。ほうずきに穴をあけて中の卵を出し、口に含みキューキューと鳴らす。幼い頃のなつかしい思い出である。

そんな豊かな海がいつ頃か変化して行った。カキやアサリなどが捕れなくなった。それは、家庭に台所洗剤が普及しだした頃と思う。海の汚染の原因はいろいろあると思うが、生活排水も大きな要因だと思う。現在、下水道整備や合併浄化槽の普及で川が浄化されてきた。それに伴って海も少しはきれいになり、カキも岩につき始めたと思ったら、今度はエイが岩にへばりついて真っ白になるように食べてしまう。



白いところはエイが食べた後

現在私は、漁業調整委員会に出席しているが、委員会では将来を見据えた魚介類の資源回復のため、いろいろな取り組みがされている。浮きガザミや真鯛（15センチ以下）の採捕禁止の委員会指示発動などである。資源を守るため、漁業者だけでなく遊漁者や漁をする一人ひとりが、これらのことを厳守しなければならないことだと思う。

昔はいなかったエイの異常発生など、温暖化の影響なのだろうか。海水温の上昇や赤潮発生、これらがもたらす影響が海の生き物に大きな被害をもたらす。



美しい天草松島の海を守りたい

日本は海に囲まれ、食を海に依存している。私たちは海と共生していくため、身近にできることから海の再生に役立つ行動を起こす必要があると思う。昔のような海に再生することは無理かも知れないが、せめてこれ以上汚染されない美しい海を次世代の子どもに残す義務があるのではないだろうか。